

三菱UFJインフォメーションテクノロジー株式会社

設立 2009年7月1日
資本金 181百万円
従業員 約1500名
所在地 東京都中央区日本橋1-7-17 日本橋御幸ビル
URL <http://www.it.mufg.jp/>

東京三菱インフォメーションテクノロジー株式会社、株式会社UFJ日立システムズ、UFJIS株式会社の3社が合併し、2009年7月に誕生。主に三菱UFJフィナンシャル・グループのシステム構築において企画、設計、開発、運用などを手がける。導入先と一緒に企画から参加する手法で、各社からの信頼は厚い。

株式会社大和ビジネスサポート

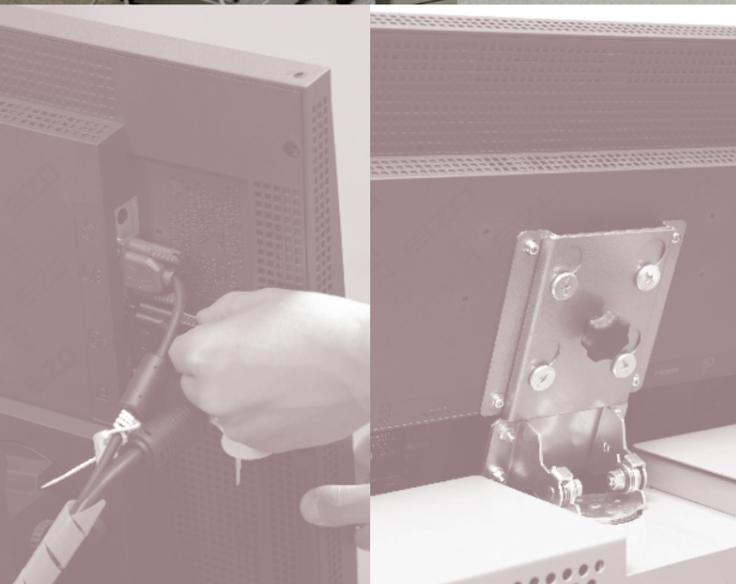
設立 2004年12月9日
資本金 3百万円
所在地 埼玉県さいたま市中央区鈴谷2-771-1
URL <http://www.yabs.jp/>

2004年12月設立。豊富な経験と高い技術力を武器に、システム開発を通してクライアント企業のビジネス面における課題を解決している。コンサルタント的な業務から最前線での開発まで顧客のニーズに合わせて柔軟に対応できるのが強み。



FlexScan® EV Series

三菱UFJインフォメーションテクノロジー株式会社 様



広い視野角でフレキシブルに設置できるナナオの液晶ディスプレイが
会議の活性化とペーパーレス化を一度に実現

製品に関する情報についてはEIZO Webサイトで

<http://www.eizo.co.jp>

■製品に関するお問合せは 受付時間 月～金 9:30～17:30(祝日、弊社休業日を除く)
EIZOコンタクトセンター  0120-956-812

資料も相手もはっきり見える。 それが、会議に革命をもたらした。

すべてのディスプレイに同じ映像を出力する「トルネードディスプレイ®」。
シンプルな構造ゆえに、ディスプレイの性能が使い勝手を左右する。
だからこそ、選ばれたのは『FlexScan EVシリーズ』だった。

会議システムの価値を決定づけた FlexScan EVシリーズ

三菱UFJフィナンシャル・グループで利用されるITシステムの企画から開発、運用までを一手に担うのが三菱UFJインフォメーションテクノロジー(以下MUIT)だ。エンジニアの優れた技術と熱意が、使いやすく安定したシステムを構築し、多角的で高品質な金融サービスを支えている。

MUITの強みは、自社内での業務改善やシステム開発にも積極的なところ。良いシステムが出来上がれば、グループ企業にも展開するという、正のサイクルを生み出している。成功例の1つが、大和ビジネスサポートと共同で開発したペーパーレス会議システムの「トルネードディスプレイ®」だ。

トルネードディスプレイ®は、液晶ディスプレイ、シンクライアント端末、マウス、キーボードがセットになった会議用システム。2～3人に1台の割合で複数の液晶ディスプレイを設置、すべてのディスプレイに同じ映像を表示する。マウスとキーボードの入力信号も同期していて、参加者全員が同じ資料を見ながら、同じ様に操作できる。

シンプルなシステムがもたらしたのは、これ

までなかった新しい会議のスタイルだ。まず、資料を画面で共有するため、ペーパーレス化が実現できた。画面上にメモを書き、その場で確認できるため、認識の間違いも減った。参加者の距離が近く、お互いの顔がよく見える、議論しやすい環境まで生み出した。

トルネードディスプレイ®で重要な役割を果たしているのが、採用された液晶ディスプレイ『FlexScan EVシリーズ』だ。決め手を、ITプロデュース部 マネージャー 小柳 幹氏は「広い視野角と視認性の良さ、スタンド調整範囲の広さ」と話す。この結論に至るまでの道のりは「試行錯誤の連続だった」(ITプロデュース部 主任 瓦井 麻衣子氏)という。

きっかけはペーパーレス化

MUITには、2005年から現在まで続くビッグプロジェクトがある。その名も「ワークスタイル変革プロジェクト」だ。狙いの1つに掲げられたのが「会議のペーパーレス化」。当時、MUITでは、会議のたびに資料をプリントアウトして参加者に配布していた。資料には部外秘の内容が多く、会議の後はずきにシュレッダー行き。小柳氏は「捨てるためにプリントアウトしているようなものだった」と、当時の様子を振り返る。

紙を減らす——という目的のもと、最初に導入したのがプロジェクターだ。A3サイズの資料でも、スクリーンに内容を映せば参加者で共有できる。ペーパーレス化という点では前進があったものの、肝心の会議が「皆がスクリーンの方を向いて、進行役が淡々と話を進めていく」(小柳氏)スタイルだった。「紙を減らすという目的は達成できても、会議の質が上がらなければ成功とは言えません」と小柳氏が話すように、プロジェクトチームは新しい課題の改善に向けて動き出す。

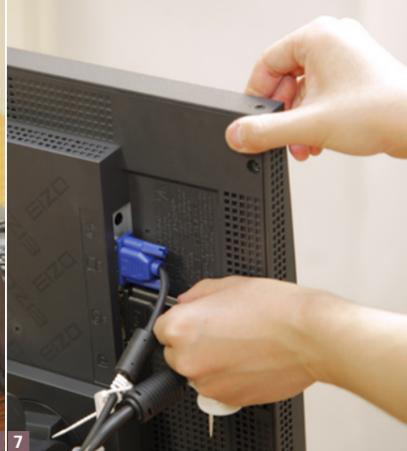
資料も相手の顔も見えるシステムへ

1つの場所で議論を集中する——という発想で次に導入したのが、42型のプラズマディスプレイ。四角く囲んだ会議机の中心に複数台を設置した。画面とお互いの顔を見ながら話ができる点に着目したのだ。しかし、これも壁にぶつかる。プラズマディスプレイは解像度が低く、参加者から画面までの距離も遠かった。文字や表が読みにくく、採用は見送られた。

視認性の向上——を実現するべく次に着目したのが、参加者の前に液晶ディスプレイ



4 会議室に設置したトルネードディスプレイ®。机に直接置くタイプで、配置を変えれば、研修やセミナー用の端末としても利用可能。5 スタンドの調整幅が大きく、高さを上げれば自席のPCのように使える。6 画面を一番下まで下げたところ。スタンドの内部は滑車が入っており、高さ調整には力はいらない。7 画面の角度を90度回転させるピボットにも対応。ケーブルの着脱が簡単で、設置や撤収が楽にできる。



を置く方法だ。ディスプレイを机の上に置き、画面の高さを下げればお互いの顔も画面も見やすくなった。高解像度を重視してA3サイズの資料が紙と同じ大きさで表示できる1920×1200ドットの製品を使ったものの、画面が大きすぎてお互いの顔が隠れてしまった。しかし、転んでもただでは起きない。「画面の位置をより低くすれば、お互いの顔を見ながら話ができる」(大和ビジネスサポート 代表取締役 大和 裕二氏)という発見もあった。試しに、ディスプレイを机の上に置いてひもで固定したところ、画面の位置が視線より低くなった。ディスプレイといすは、会議机越しに設置した。これならば、正面に参加者の顔が、視線を少し落とせば資料が見える。だが、いすに代わってディスプレイを低い位置で支えられるスタンドが見つからない。業を煮やしたプロジェクトチームは「床置きスタンドを自分たちで開発」(瓦井氏)し、ディスプレイを乗せた。これが初代のトルネードディスプレイ®だ。

さらなる改善——を目指して、チームはコストの削減と機能の向上に取り組む。まず、解像度はそのままに、低価格のディスプレイを試した。ところが、安いモデルは視野角が狭い。視認性が落ちては本末転倒だ。同じ時期に市場で液晶ディスプレイが安くなっていたこともあり、採用する液晶ディスプレイをゼロから見直すことにした。

A3サイズの資料を表示するため、高解像度であることは必須条件。白羽の矢が立ったのは、当時主流になりつつあった1920×1080ドットのフルHD表示に対応するモデルだ。A3サイズの資料を満表示できるうえ、対応製品の増加に伴い価格が手頃になっていたのも評価につながった。見やすさも欠かせない。水平方向の視野角が、178度ずつと広い製品に絞った。フルHDの液晶ディスプレイは、画面の縦幅が1920×1200

ドットのモデルより短い点にも注目。検討の結果、昇降機能の付いたスタンドで画面を机の上すれすれまで下げれば、画面と相手の両方を自然な姿勢で見られることも分かった。高解像度、広視野角、スタンドの昇降機能という3要件を備えた液晶ディスプレイを探し、たどり着いた先こそ、第二世代のトルネードディスプレイ®に採用された『FlexScan EVシリーズ』だった。

ナナオ製品には スペック以上の価値がある

トルネードディスプレイ®は、会議のスタイルに大きな変革をもたらし、MUITになくはない存在となっている。定例会議のように大人数が集まる場合のみならず、2～3名の軽いミーティングでもトルネードディスプレイ®が利用されている。瓦井氏は「OA機器の1つではなく、机やいすのようなオフィスに必要な設備に近づきつつある」と笑顔を見せる。これほどまでに、気軽に使えるようになったのは「スペックに見えない、FlexScan EVシリーズの良さ」(小柳氏)にあるという。例えば、画面の周囲にあるベゼル部分。光の反射を最低限に抑えるよう、ベゼル部分には細かいシボ加工を施す。使う環境によって光源の位置が変わっても、画面が見やすく目にもやさしい。液晶ディスプレイは、人と対峙している時間が長い。そのため、少しでも使い勝手に難があれば、使い続けたいという気持ちになりにくい。だから、ナナオは利用者視点で改善を重ねている。「今後もナナオの液晶ディスプレイを採用する予定です。欲しい機能は映像信号の無線化ですね」と小柳氏。無線方式やセキュリティという課題はあるものの、実現すればシステムをさらにコンパクトにでき、導入やレイアウトの変更にも柔軟に対応できる。プロジェクトチームがナナオ製品に寄せる期待は大きい。



三菱UFJインフォメーションテクノロジー
ITプロデュース部 マネージャー
小柳 幹氏

1995年、三和銀行(現在の三菱東京UFJ銀行)に入行。銀行情報システムの開発業務などを経て2010年より現職。ワークスタイル変革プロジェクトでは、リーダーとしてトルネードディスプレイ®をはじめとしたコミュニケーションツールの施策立案、推進を担当。



三菱UFJインフォメーションテクノロジー
ITプロデュース部 主任
瓦井 麻衣子氏

2005年にUFJ銀行(現在の三菱東京UFJ銀行)に入行後、銀行統合プロジェクトのPMOなどに従事。2006年より現職。ワークスタイル変革プロジェクトではトルネードディスプレイ®やWeb会議など、コミュニケーションツールの企画、開発、展開、運用を担当する。



大和ビジネスサポート
代表取締役
大和 裕二氏

大手メーカーでプログラム開発、プロジェクトマネジメント業務に従事した後、2004年に大和ビジネスサポートを設立。ワークスタイル変革プロジェクトには初期から携わる。



1 トルネードディスプレイ®。1ユニットあたり、液晶ディスプレイは3台で主に10名程度の会議に利用する。着席すると正面に参加者が、少し視線を落とすと画面が見られる。2 移動のしやすさを高めたトルネードディスプレイ®。1つのテーブルに1台の液晶ディスプレイを設置している。ユニットの数を増やして大人数にも対応できる。3 背面はVESAマウントで固定。角度が自在に変えられる